（ 続紙 1）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	渡邉　暁子
論文題目	フィリピン・マニラにおけるムスリム・コミュニティの形成過程		

（論文内容の要旨）

本論文は、キリスト教徒が圧倒的なマジョリティを占めるフィリピンのマニラにおいて、ムスリム・コミュニティがいかに成立し、外部と応答するなかで、どのように変化しながら存続してきたかを歴史的視点から描き出す研究であり、著者は、2002 年から 2007 年にいたる、のべ 3 年半以上の長期にわたるフィールド調査と文献調査から得られたデータにもとづいて論述を展開している。

第 1 章では、フィリピン国内外の政治経済的な背景を視野にいれながら、アメリカ植民地期（1898～1941 年）、国民統合期（1946～1972 年）、戒厳令期（1972～1986 年）、そしてポスト戒厳令期のマニラにおいて、ムスリム人口が増大し、ムスリム・コミュニティが増加していくありさまを概観している。

第 2 章から第 5 章までは、事例研究として、特定の民族が覇権を握ることなく、多様な民族が共住し、社会生活が営まれてきた、フィリピン・ムスリムの縮図ともいえるマニラの S 地区を取り上げている。

第 2 章では、現在の S 地区をその内外から概観している。すなわち、住民の社会組織、空間構成、宗教・教育施設、外部から見た S 地区のイメージなどがのべられるとともに、第 3 章以下の論述で使われる用語や概念の導入がはかられる。

第 3 章では、S 地区が立地する土地をリビアのカダフィ政権がフィリピンのムスリム支援とイスラーム施設建設のために寄進地として購入した 1971 年から、この土地がムスリムの居住地と化す過程を経て、自治組織「サラム理事会」が結成される 1990 年までの 20 年間に、S 地区の住民が、どのような出来事を経験し、どのような社会生活をおくってきたかが論述される。その焦点は、寄進地を管理していたエリートムスリムの団体、「フィリピン・イスラーム理事会」が寄進地をキリスト教系新興宗教団体に売却したことに由来する土地紛争にある。この紛争から生じた強制立ち退き等によって、S 地区では人口減少と民族構成の変化が生じ、タウスグ人が多数派となり、サラム理事会の役職の大半を占めるようになっていった過程が詳細に描き出される。

第 4 章では、1991 年から 2000 年代初頭までの約 10 年間の S 地区における社会生活の変化についてのべている。この 10 年は土地紛争が裁判において争われていた時期と大きく重なる。サラム理事会は、強制立ち退き等によって減少した S 地区の人口を増やすために、S 地区へのムスリムの移入をはかった。また、他地域から強制的に立ち退きをせまられたムスリムを受け入れた。そのために、多様な生業に従事する、さまざまな民族のムスリムが S 地区に居住するようになった。だが、この時期には土地紛争が裁判所で争われていた時期であり、S 地区の住民はムスリムとして団結し、自己

を提示する闘争を展開していった。だが、それと並行してS地区住民の民族への分化が進行し、7つの民族評議会が組織されるとともに、モスクも分立していった。また、その一方では、多様な民族が混住するようになった結果、民族横断的な姻族・親族関係が成立していった。

第5章では、第4章までにのべられたような過去の経緯が累積した結果、現在のS地区に見られるようになった社会的な動向を記述、分析している。そのひとつは、民族の団結を求める動きであり、もうひとつは、キリスト教徒に対してムスリムとして連帯し、ムスリムとして生きることを追求するイスラーム主義の動きである。また、イスラームや慣習法とは距離を置き、マニラの主流社会に底流する個人主義を取り込んだ、S地区住民が「プラクティカル」とよぶ生活様式も影響力をもつようになっている。

終章では、第1〜5章までの論述を要約し、その内容に考察をくわえるとともに、地域の現状を理解し、把握するための理論的提言をおこなっている。すなわち、地域で営まれる生活を社会組織や文化体系のような複合体としてとらえ、そうした複合体が単線的に変化してゆくような図式はS地域を研究する上では役に立たないことや、さまざまな過去の歴史的経緯や外部から浸透してくる多様な理念や価値が体系を構成することなく、同時並行的に効力をおよぼしている事態こそを注視しなければならないことが主張されている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

フィリピンのマニラに居住するムスリムは、主として南部フィリピンにおけるムスリム勢力の台頭、海外就労に由来する家族親族関係の再編成、イスラーム主義の影響と関連づけて研究されてきた。これらの研究は、マニラのムスリムが彼らを取り巻く圧倒的多数者であるキリスト教徒やフィリピン国内外の政治経済情勢に応答しながら生活を営んできたことや、またそうせざるをえなかったことを等閑視してきた。本論文は、マニラのムスリム・コミュニティのひとつである S 地区に焦点をあて、その形成史を外部との相互関係に配慮しながら描き出すことを通して、こうした先行研究の問題点を乗りこえようとする試みである。

本論文は以下の諸点において学術的に高く評価できる。

その第 1 点は、行政当局や多くのマニラ市民から犯罪者の巣窟と見なされる一方、外部者に強い警戒心をもつ S 地区で長期の参与観察をおこない、S 地区がたどった歴史的過程を、口承史、新聞・雑誌記事、行政文書等を丹念に織り合わせることで、詳細に描き出したことである。それゆえ、本論文で提示される、とりわけ著者自身のフィールド調査から得られたデータは貴重であり、本論文のように、マニラにおけるムスリム・コミュニティの成立から現在にいたるまでの歴史的過程を住民の視点を十分にくみとるかたちで丹念に描き出した研究はこれまで皆無だったといえる。

第 2 点は、ムスリム・コミュニティの内部で形成される民族組織を、エスニシティの発現様態として理解する、よくありがちな研究に陥ることなく、S 地区における民族組織が形成､維持されつづけてきた背景にある事態を明らかにしていることである。すなわち、民族組織のリーダーは、海外就労ビジネスの経営者であり、彼らは故地から同郷関係者や親族関係者を海外就労希望者としてリクルートするとともに、S 地区が海外就労希望者の中継基地や帰還地として利用されていることなどが、詳細な記述を通して見事に描き出されている。

第 3 点は、異なる民族やキリスト教徒との結婚や緊密な親族関係に由来する「ミックス」､「ハーフ」､「メスティソ」とよばれる一群の人々（以下「ミックス」と総称）を看過することなく、彼らの存在や行動が民族組織とどのような関係にあるのかを明らかにしたことである｡「ミックス」たちは民族組織に距離をおき、民族の慣習を守ることに無関心だが、こうした彼らの存在は民族組織の指導者たちにとっては脅威であり、民族の慣習を順守させようとする作用を生み出す原因となっている。これらのことをふくめ、S 地区のような混沌とした社会空間こそが、マニラという多民族・多宗教空間から必然的に生み出される「ミックス」たちの適地となっていることを明らかとした本論文の功績は大きい。

第 4 点は、S 地区が経てきた歴史的な経緯や、S 地区住民の外部との相互交渉が累積した結果、S 地区には矛盾する理念や価値が同時並行的に作用する事態が成立していることを明らかにしたことである｡「ミックス」とよばれる人々の民族の慣習に対す

る態度の背景にあるのは、マニラという都市空間に蔓延する個人主義的な生活様式であり、これに対して、民族組織の指導者たちは民族の慣習の維持、強化をはかろうとする。だが、「ミックス」はキリスト教化するのではなく、その一部はイスラーム主義に共感をもち、その活動に深く参画している。他方、イスラームは、キリスト教徒が圧倒的多数をしめる都市環境のなかに置かれており、そこから浸透してくる理念や価値とせめぎあうことを余議なくされている。こうした矛盾する多様な理念や価値が同時並行的に作用する S 地域の生活の諸局面を明らかにした本論文の理論的意義は大きい。

以上の諸点から、本論文は、フィールド調査にもとづく地域の総合的理解をめざす本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた優れた論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 4 月 23 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。